
戦国と綾ものかたり

土岐 晴嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国と綾ものかたり

【Nコード】

N0127M

【作者名】

土岐 晴嵐

【あらすじ】

現代では存在を知られていない「忍者」の服部仁太。彼は異世界に飛ばされ、敵国に追われているお姫様を助けた事で彼女を護ることに…。

初めての作品で日々悩みながらの執筆、拙い文章ですがよろしくお願ひします。

キーワードから架空戦記を外しました。

利用規定第20条に伴う注意事項

この稚筆はオリジナルとして書いております。
しかしながら過去に私が拝読し、頭の片隅に残った文章表現の一部
が出る場合があります。

気を付けて書いていきますのでよろしく願います。

序章

和服姿の少女の荒い息が春の静かな森に響き渡る、その後ろからは無骨な男の叫び声と重そうな防具がこすれる音が二つ。

「待たんか、その娘」

「おまえは佐津の国の綾姫ではないか、まてえ」

少女は男の呼びかけに一向に止まる気配は無く、さらに走る速さを増して森の中を逃げる。

男たちは日本の戦国時代の足輕を思わせる革の鎧と腰には日本刀を差し少女を追いかけるが、防具と武器の重さと大柄な体も邪魔をし少女との差は開くばかり、少女はそのまま無事に逃げ切れるかと思えた。

しかし、そんな状況も長くは続かなかった。

「きゃあっ」

少女の短い悲鳴があがる。

足場の悪い森の中を走っていたために木の根に躓いて転んでしまったのだ。

少女は立ち上がろうともがくのだが、転んだ拍子に足を痛めたのか思うようにいかない様子である。

その間に鎧装束の男たちは少女に追いついてきた。

「娘よ、手間をかけさせおつて」

「逃げるということは、やはり佐津の国の綾姫なのだな？」

鎧装束で大柄な体格の男とやはり鎧装束で精悍な体付きの男がそう

言いながら、少女を逃がすまいと二手に分かれ近づいてくる。

少女は立ち上がることをついに諦め、静かにその場に留まっている。

その時、近くにあった大木から一人見慣れない格好をした少年が現われた。

少女は最後の救いとばかりに少年に呼び掛ける。

「男二人に追いかけられているのですが、助けてはくありませんか」

少年は現状を理解してないらしく、とぼけた顔つきで立ち尽くすばかり。

そんなことをしている間に、男たちはどんどんと近づいてくる。

「綾姫よやっと見つけたぞ、これで大殿様から褒美がもらえる」

「そうじゃ、お主に恨みは無いがこの乱戦の世に生まれてきたことを恨むんじゃない」

少女は一向に動く気配のない少年に呼び掛けることを諦め、少年にゆつくりと歩み寄り顔と顔が触れ合うのではないかというぐらいに近付けた。

少年はとても美しい少女の顔がすぐ近くにあるのをやっと認めたが、動くことも出来ずにその場に立ち尽くすしか出来ない。

少女は数刻の間逡巡していたが、男たちがもうすぐ傍まで来たことを認めると何かを決心して、目を閉じ少年の唇に自分の唇を押しあてるのであった。

序章（後書き）

初めての作品で稚拙な点はあるかと思いますが、連載ができるように頑張りたいです。

第一話 現代の忍者！？

「あつついな、いい加減教室にクーラー付けてくれないかな」

自分以外はだれもない教室の机に座り、夏の暑さに辟易している様子の少年が一人誰にともなく呟いた。

彼は教師から渡された、辞書ほどの暑さがあるうかという膨大なプリントを、まじめとは言い難い態度でやつつけにかかっている。

「なんで日本人が英語なんてやんなきゃいけないだ、こんな事やらないでもいい世界にいればいいのに…」

そう呟いた時、ふと頭に小さく響く声があった。

「承知した、その願い聞き届けよう」

「んっ、誰かいるのか？」

誰かのささやき声が聞こえたように感じた少年が、周りを窺うも誰の姿も見つけることが出来ない。

あの声は空耳だろうと結論を出し、改めて補習のプリントに取り掛かる少年であった。

この事があとに重要な事態を自身にもたらすのだが、この時の少年には分る筈もない。

この少年は忍者である。

現代の日本で忍者というとアニメやコスプレを思い浮かべ、本物だとは思わないだろう。

彼の名は服部仁太、はっとりじんた日本国内を探しても服部という名前はそれほど

珍しい名前ではない。

しかし、先の忍者という単語からある人物を連想する人は多いのではないだろうか。

そう、彼はかの有名な忍者、服部半蔵の子孫に当たる。

戦国時代であれば忍者は重用され活躍したであろうが、現代の日本では時代劇やアニメなどの世界で登場する以外では、現実の職業としては存在しない。

彼はそんな時代をひっそりと生きる、本物の忍者という仁太であったが、それを周囲の人たちに知られる事は掟によって厳に戒められており。

自らの持つ技術を自慢する事も出来ず、目立たず冴えない少年というのがみんなの認識であった。

朝から晩まで親父に忍術の修業させられて、夏休みに補習なんてやってられないよ。しかもクラスで一人だけ補習っていうのは凄く恥ずかしい…。

そんな事を思う仁太。

いつもであればクラスメイトの一人か二人が道連れになり、何人かで補習を受けたりしたので気にしないが、今回のテストは比較的簡単であった為に一人で補習という状況に陥っていた。

「服部っ、補習プリントは終わったか」

野太い男の声が、もの寂しい雰囲気の教室に響きわたる。

同時にがっちりとした体格に、スーツをだらしなく着こなした男性が教室に入ってくる。

彼は仁太が赤点を取った英語科目の教師をしており、今回のテストで全員が補習なしなら彼女と少し旅行に行けると思っていたので、仁太に対しての態度は冷たい。

「先生、一人だけ補習を受ける事になってごめんなさい。謝るから、この圧倒的な量の補習プリントを減らしてください」

口元は笑顔なのだが目元は全く笑わず、仁太にバカなことを言うなという風に教師は言った。

「何を謝っているんだ、私は貴重な休みが無くなった事なんて怒ってない。今回はみんなの点数が良くて補習しなくても良さそうだと思うってしたら、服部だけ補習と分かって絶望なんてしてないぞ」

その言葉を受けた仁太は恐縮し、英語教師に謝ることしかできなかった。

英語教師との緊張感のある（というか仁太の精神的打撃が大きいが）やり取りが終わり、夕方の日が暮れかかる頃に帰宅する仁太。

「ただいま」

「あらあら、おかえり」。随分と遅かったのね。

補習科目は一科目しかないから早く帰れる、って言っていたのに、もう日が暮れる時間じゃないの。

お父さんはもう日課を始めてるわよ、仁太が遅いから帰ったらいつも以上に厳しくするって言っていたから覚悟していたほうが良いんじゃないかな」

「わかったよ、とにかく裏庭に行ってくるよ」

帰宅のあいさつと同時に母親から不幸の予告を受け、テストの赤点から来る負の連鎖を嘆くことしかできない仁太であった。

母親とのやり取りのあと、仁太は赤黒布で作られた忍者装束に身を

包み家の裏庭へ急いで向かう。

私たちが思い描く忍者装束と言えはの黒であるが、実際に夕闇に紛れるときには、真っ黒な色よりも少し赤みがかった色の方が認識されなかったりする。

また他にもこの衣装には秘密があり表と裏の色が違い、この裏側には昼間の試用を考慮して軍隊の迷彩柄が入っていてリバーシブルで使えるようになってる。

仁太は暗く広がる森に向け叫んだ。

「お頭、ただ今帰りました」

すると深い闇の中から、中年男性の太い声が帰ってきた。

「仁太、何をやっていた、修行をおろそかにするでない。それは忍術だけでなく、学問にも当てはまるのだぞ」

「分かっているよ、でも英語だけはどうしても出来ないんだよ」

「馬鹿者！！」

英語だけは出来ないなどと甘えるでない。毎日、サボらず修行しておれば、少なくとも赤点などという不届きな点数を取ることとはなかったであろう。おまえはまだまだ修行がたらん」

その声とともに、仁太と同じ忍者装束を着た男性が姿を現した。男は覆面をしており、顔を見ることが出来ないが、声の様子から50歳前後ではないだろうか。

闇の中から現れる様は、何もない空間が当たり前であった場所に、突如として人が現れたかのような錯覚を仁太に懷き、さすがに忍術の腕の違いを実感させられる。

「それもこれも、毎日まいにち忍術の修行を遅くまでやっているか

ら、英語の勉強が出来なかったんだよ。そんなに言うのなら修行の時間を減らして、勉強をする時間をくれよ」

「馬鹿を言うんじゃない、忍術の修行と勉強を両立させねばならぬ。私が学生の頃は忍術も勉強も優秀であつたぞ」

男はそう言つと仁太を哀しげに眺めて言つた。

「わが息子ながら情けない、どこで育て方を間違えたのか…」

最後の言葉は、テストで赤点を取る度に言われている言葉である。仁太も言われ慣れている筈であり、いつもであれば聞き流していたのだが、今日は昼間に英語教師からの言葉による精神攻撃で虫の居所が悪かつた為にいつも以上に腹が立つた。

「赤点があるごとに、育て方を間違えたと言われて堪るか」

言い捨て、仁太は修行で慣れた森の中に走つていった。

もちろんお頭こと仁太の父親と仁太自身、これから起こる事も知らず、修行で慣れた森の中に入って行つたぐらいの認識しかなかった。

第一話 現代の忍者！？（後書き）

文章って難しいですね

第二話 異世界

修業で慣れた森へ走りこんだ仁太は父親と顔をあわせる事を避けるために、普段はあまり立ち入らないような森の奥深くへ進んでいた。

さっきはあんな事を言われて腹が立つたけれども、よくよく考えるといつも言われてていつもは気にしてない事だよな。

あの場を飛び出してこんな奥深くまで来たけれども、お腹も空いたし家に帰ろうか。でも今からのこのこと家に帰っても「お腹を減らしたから帰ってきた」と言われて笑われそう、家に帰る理由が無いものかな…。

初めの方こそ腹を立てていたが、一時間も森の中を歩いているうち段々と落ち着きを取り戻し、お腹も空いてきた事もあるって家に帰る事を考え出した。

実は結構いい加減なところもあるため、こういった場合にありがちな「絶対に戻らない」と片意地を張るような事はないのである。

しかしあのタイミングでの「ふざけるな」発言で飛び出したとなると、笑われない理由を探して家に帰るのは難しそうだ。

なんであんなに怒っちゃったんだよ、これじゃあ恥ずかしくて戻るに帰れないじゃないか、自分の馬鹿野郎が。

飛び出した状況を冷静に考えれば考えるほど、家に帰れない事に気が付き途方に暮れる。そんな時に昼間の補習中に聞こえた声と同じ声が聞こえた。

「そなたの願い道理の場所へ行こうか」

また聞こえたささやき声に周りを窺うが、誰の姿も見つける事が出来ず只ただ首を傾げる事しかできない。

忍術により人の気配を察知する事も得意であるが、声は聞こえても姿の見えないこの状況に少し恐くなってきた。

なんか恐いし家に帰るかな。

人は自分で説明できないような状況に陥ると恐怖を感じる、それは日頃忍術の修業で鍛えられているはずの仁太でさえ例外ではなかった。自らの恐怖に負け恥ずかしさを我慢し帰宅を決意した仁太は、その場で方向を変えると家へ向け森の中を進み始めた。

仁太は森を戻るうちに不可解な状況にあっていた。もういつもの修行場に出ているもおかしくない筈だが、いつまで経っても見慣れた光景の場所に辿り着くことが出来ないのだ。

普通であれば「道に迷った」で済ますのであるが、修業を積み道に迷う事は滅多にないし、しかもあまり来ない森の奥深くとはいえ修行場で迷うことなど考えられない。

しかもいつの間にかやら、修行場に生えている木の種類と違う木々が周りに生えているのを見て、自分はどこに出ってしまったのかと困惑する。

そんな時、遠くで少女の短い悲鳴と男たちの声が仁太の耳に入ってきた。悲鳴が聞こえてきた事で様子を見に行ってみようと、声の下方向へ向かう。

「男二人に追いかけていらるのですが、助けてはくさいませんか」

森の中から顔を出すと少女から助けを求められた仁太、しかし状況もわからずとぼけた顔で立ち尽くす。

普通であれば少女から助けを求められれば、助けに入るぐらいの甲斐性のある仁太ではある。しかし、鎧装束で大柄な体格の男とやはり鎧装束で精悍な体付きの男に、長い黒髪で顔も可愛らしく、黄色地にユリの花が書いてある着物姿の少女が追いかけるという、時代村や時代劇でしか見ないような状況に今回は対応が出来ないのも無理からぬ事ではないのではないだろうか。

鎧装束の男二人に追い詰められていく少女は、とぼけた顔のまま動かない仁太に呼び掛ける事を諦め、ゆっくりと歩み寄り顔と顔が触れ合うのではないかというぐらいに近付けてきた。

仁太は着物姿の少女の顔がすぐ近くにある事に気が付いたが、動くことも出来ずその場に立ち尽くす事しか出来ない。目の前にとっても整った少女の顔がある事でいよいよ混乱の極みに達する。

やっぱりかわいいなとか、こんなところで時代劇の撮影でもやって居るのか。などと現実から顔を逸らしにかかる仁太であったが、少女の次の行動に驚愕する。

少女が目を閉じ仁太の唇に自分の震える唇を押しあて、キスをしてきたのだ。これには仁太も驚き一瞬考えが止まったものの、少女の恐怖を唇を通して感じたからか、冷静に現実を理解することができるようになっていた。

取り合えずこれは時代劇の撮影ではないな、この子も相当怯えているし本当に助けた方が良さそうだ。

そう決めた仁太の動きは速かった。

まず自分にもたれかかる体制の少女を、仁太を挟んで男たちとは反対に移動させると木の上に跳躍した。

そして懷から棒状で先がとがった黒いものを取り出すと、鎧を着けた大柄な体格の男に向け投げる。

この棒状の物体は棒手裏剣と呼ばれるもので、装束の中に嵩張らず収納できるために修業の時にはいつも持っているものである。

棒手裏剣が男の得物を持った方の手に刺さる。間を置かず仁太はもう一方の男にも棒手裏剣を投げ、またもや得物を持っている方の手に命中させた。

男たちは棒手裏剣が手に刺さり、たまらず得物を字面に落とす。

次に仁太は懷から素早く煙玉を取り出すと、少女と男たちの間をめがけ投げる。地面に叩きつけられた煙玉は大量の煙を吐き出し、男たちから少女が見えなくなった。

木の上から降りて来ると、耳元で「声を出さないよう」に少女に注意し自らの腕に横抱きにした。いきなり横抱き（いわゆるお姫様抱っこ）をされ少女は驚き声を上げそうになったが、抱き上げられる前に声を出さないように注意されたのを思い出し、急いで自らの口を手で塞ぐ。

着物少女を抱き上げ全力でその場を逃げ出す仁太。

忍者とはいかにして素早く逃げ切るかという事も大事なのだ。

15分ほど離れた場所で追っ手が無いことを確認し少女を下ろし、初めての实战で緊張のしっぱなしであった仁太はその場に座り込んだ。

いつも修行をしていても慣れないの事をしたのでいつも以上に疲れたのである。

そんな時、少女はまっすぐに仁太の方を向いたかと思うと、いきなり地面に屈みこんだ。そして体を前に倒し手を地面につける。

「先ほどは危ないところを助けていただきありがとうございます。そして、はしたない真似を致しまして申し訳ございません」

謝罪の言葉を口にする時の少女は首先まで真っ赤になり、今にも湯気が噴出すのではないかというほどであった。少女の言葉を受け、自分がこの少女にキスをされたということを思い出した仁太も顔を赤くする。実は彼にとって初キスであったため特に気恥ずかしい。

「いやあ、気にしないで…」

「そうは参りません、あなたは私の命の恩人でございます」

そう言うともた深く頭を下げる少女。

「私は綾と申します。あなたのお名前はなんとおっしゃるのでしょうか？」

「綾さんね、僕は服部仁太といいます」

仁太の名前を聞き、右手を口元に添え軽く驚いてみせる綾。

そんなちょっとした仕草が可愛くもあり、またあの口でキスをされたのだなと思うともたもや恥ずかしくなる仁太。そんな仁太に対して綾の質問は続く。

「服部さんというのですか、姓名が付いているということはどこかの武将のご子息ですか？」

「特に武将の子供という訳では…、私がいた所では姓名が付いているのが当たり前なんですよ」

「そうなのですか、この国では一般の方々の何は姓名がないのが一般的なので、高名な武将のご子息かと思ってしまいました」

綾の質問に答えつつ自らの疑問も聞いてみる事にした仁太。

「綾さんもあの男たちから追われている時に『佐津の国の綾姫』と呼ばれていましたか？という事なのですか、あの言葉が本当であればあなたはお姫様ということになるよね？」

「そのことですか、あなたには聞こえていないと思い隠そうと思っていたのですが…」

「無理にとは言わないよ、ちょっと気になっただけで…」

仁太の質問に少し困った顔をする綾。そんな綾を見てまずい質問をしてしまったかと申し訳ないような心境になる仁太。その言葉と態度を見て、綾は慌てて先の発言について謝罪と説明をしてくれた。

実はかつて佐津という国がありその殿様であつた大河内家の一人娘が自分であること。そして三年前に隣国であつた川津の国に攻められて佐津の国は滅びたのだが、自分は家臣夫婦に連れられて命からがら逃げ延びて山中で静かに隠れ住んでいるという事であつた。後になってキスをしてきたのかをたずねたところ「私が知らない殿方にキスをする所を見せて、姫では無いと証明しようとしたのですが」と顔を真っ赤にしながら答えてくれた。しかしあの行動は特に男たちに無意味であつた様に思う仁太である。

「そうだったのか、それで追われていたんだね。ならさっきの男たちは川津の国の家来と見て間違いないね」

「はい、その見立てで間違いないと思います。多分私が復讐をすると思っているのではないでしょうか」

綾は復讐をしようと考えたことはあるが、最近はずかしく山中で生きていくことに幸せを感じており復讐心はないと言うことを穏やかな顔で語る。その顔を見て仁太は胸がぎゅっと締め付けられるような切なさ、とても暖かな気持ちを感じて戸惑っていた。

そんな仁太の変化にも気付かず、綾が自分が今暮らしている家に来ないかと提案した。仁太も自信が今どこにいるのかわからない状況であり、綾の家へ行くことにした。

第三話 綾の家

先ほどの山中から時間にして一時間ほど歩いた山の中に、綾の住む山小屋があった。その山小屋は壁のところどころが崩れ落ちており、人が住んでいると言われなければ分からないほどぼろぼろであり、ひと目見たときには倉庫なのかという感想を抱いたのも仕方ないだろう。

綾はそんな仁太を小屋の前に待たせ中へ入っていった。

「しずさんただいま、今日はお客さんがいるのだけれど」

すると中から年配の女性の声で返答が帰ってきた。

「あらまあ、どうしたの綾様。ここには滅多な事が無い限りは人を連れてきてはいけないと言ってあったはずだけれども、何かあったのかい？」

「実は川津の国の家来に追われたのだけれど、外で待っていていらつしやる方に助けて戴いたの」

「それは大変だったね、ここももうすぐ引き上げないといけないのかね…。それじゃあ命の恩人様を中へお通しして差し上げて、出来るだけのお礼をしなくちゃいけないね」

「はい、それではお呼びしますね」

小屋の中に居る年配の女性とのやり取りが終わった綾は小屋から出てきて仁太の方を向き。

「服部さん粗末な小屋ですがどうぞお入りください」

「それじゃあ、お邪魔します」

綾に案内されて（といつても小屋に部屋は一つしかないが）中に入る仁太。

小屋は木戸を開けると土間と呼ばれる炊事を行う空間があり、左側に少し高くなつて囲炉裏のある4畳ほどの居間があるという、現代で言う所のワンルームという構成であつた。入つて直ぐにその囲炉裏の前でたたずむ、背中の曲がつたおばあさんに頭を下げられた。

「貴方様あなたが綾様を助けて下さつたのですね、本当にありがとうございます。私わたしは綾様の世話係をやっております、しずと申します」
「僕は服部仁太といいます。しずさん頭を上げてください、僕は大了した事をしていません。ただ逃げる手伝いをしただけです」

大した事はしていないので頭を上げてくれという仁太に対し、しずと名乗つた女性はさらに頭をさげあなたの手伝いが無ければ綾様は逃げ延びられず、川津の国の家来に捕まっていただらうからいくら感謝してもし足りないのだと話す。

そんなしずの言葉に仁太はとても恥ずかしいやら、こそばゆいやら少し落ち着かない。

「服部さん、今日は夕食を召し上がっていつて下さい。しずさんもそんなに頭を下げられると服部さんが落ち着きませんよ、腕によりをかけて夕食をご馳走しましょう」

綾に話しかけられたことで救われた気分になる仁太、しずも綾に言われやつと頭を上げ夕食の準備をするために土間へ降りていった。

しずが土間に降りるのを確認した綾は、笑みを浮かべながら仁太に話しかける。

「服部さん、しずが言っていた事は本当のことです。ですから私も大変感謝しております、今日はゆっくりしていただくいね」
「こちらこそありがとう。実はここが何処か分からないで困っていて、そこに綾さんが助けを求めてきたんだ。だから小屋に連れてきて貰えた事をこちらでも感謝してる」

仁太から何処かわからないという発言が出たことに疑問を持った綾は仁太にその理由を尋ねる、仁太も特に隠すことでもないので事情を話す。

「実は家の裏の林に居ただけけれど、気が付いたら知らない場所に居ただ」

仁太から深刻な顔でそんな事を言われた綾はキョトンとしており、今聞いたことが本当の事かどうか判断困っているようであったが、しばらくすると仁太にこんな提案をしてきた。

「にわかには信じられないですが、あなたの困っている顔を見ると本当の事なのでしょう。では、あなたが家に帰れるまで何も無いところですがここに居てはいかがでしょうか」

そんな綾の提案に驚く仁太、しかしさすがにそこまでしてもらうのは迷惑になるからと断るが、綾は是非そうしてくださいと強く勧めてくる。

会話が聞こえていたのだろう、土間で作業をしていたしずも仁太に滞在を勧める。

二人の勧めを断ることが出来ず滞在することにした仁太、しかし可愛い容姿の綾と一緒に居間で寝る事に抵抗があるため自分は外で寝ると言い張る。

綾は「命の恩人を外で寝かせるなんて出来ません」と頑なに居間

で寝るように勧めてくる。綾はどうやら一つ屋根の下に同年代の若い男女が一緒に寝ることの問題が理解できていないようだ。さすがは姫様箱入り娘といった所だが仁太にしてみれば堪ったものではない。

「服部様、あなたの懸念も分かりますが出来れば小屋で寝て戴けないでしょうか。命の恩人を外で寝かせたとあつては我が主君の大河内家の名折れ、私と今は居りませんが夜には主人も戻ってまいります。狭い小屋に若い男女が二人きりになる訳ではございません、どうでしょう？」

しずに二人きりではない、と言われたことで渋々と小屋の中で寝る事を承諾した仁太ではあつたが、綾が同じ部屋で寝るとなると落ち着かない。

夜になり木こりをやっているというしずの主人勘三郎かんざぶろうも戻り、山菜や猪の肉を中心とした夕食をご馳走になった仁太。

しずの主人の勘三郎は身長が高く厳つい顔、そして鍛えられた体で武人といった風情であつた。

勘三郎は佐津の国では老中職をやつていて、川津の国に攻め込まれ国が滅ぶと覚悟を決めたときに主である大河内紘正おおいちひるまさに綾を逃がして欲しいと頼まれ、武人の恥じながらも主の願いだからと綾を連れて国を脱出したのだ、とこれまでのいきさつを話してくれた。そして綾を助けてくれた事にしずと同じ勢いで頭を下げお礼を言う勘三郎に、仁太は頭を上げてくださいと言いながら、やはり夫婦だな、などと考えていた。

そして、近くの森で追つ手に追われたことを深刻に考え、近いうちにまた遠くに引越す必要があるという結論で話は終わつ

た。

余談だが勘三郎はしずと同じように、綾に窘められるまで頭を下げ続けて居たそう。

夕食も終え勘三郎の話が終わった頃、それでは寝るかという事になった。寝る体勢は四畳の居間という事もあり、仁太・勘三郎・しず・綾という並びで川の字になって寝る。

さすがに狭いが寝ることは出来そうだった。

居間で横になった仁太は今日の出来事を思い出し、これからどうなるのかと不安になりながら眠りの世界に入ってしまった。

第四話 朝餉（あさげ）の決意

真つ青な青空の下、鬱蒼と茂る木々の中から小鳥たちの囀りのコラスが響き渡る。

そんな森にある綾の家の中で仁太は眠りの世界の中にいた。しかし地表から太陽が顔を出して結構な時間が経っているために太陽の光は強く、仁太の閉じた瞼にも強烈な光を容赦なく浴びせてくる。

仁太は夢の世界と現実の世界を行ったり来たりを繰り返しながら、まどろみの瞬間が生み出す至福の瞬間を暫らく味わっていたが、蒸かされた芋の甘い香りが漂ってきた事で、空腹に耐えきれずまどろみの中から意識を覚醒させた。

「服部さんおはようございます。昨晚はよくおやすみになれましたか？」

仁太が起き上がり暫らく呆けていたところ、綾に声をかけられた。綾は仁太よりも相当早く起きていたようで、着物をすっかり着こなして土間で食事の準備をしているところであった。

仁太はそんな綾を見てとても癒されるのを感じながら、穏やかに返事を返した。

「おはよう、おかげさまでよく眠ることが出来ました。でもよく寝すぎて僕はどうかやら寝坊したみたいだね」

「そんなことはありません、服部さんはお客様ですからゆっくりしていただければ良いのです」

綾は仁太の言葉に慌てた様子をみせ、大きく広げた手を体の前で大きく振って見せた。

仁太はそんな綾を「可愛いな」と思いながら、何もせずに此処で

お世話になった事を申し訳なく思いだしてきたた為に何か手伝えることはないかと綾に聞いてみる。

綾はそれに対してお客様に働かせては申し訳ないと断っていたが、仁太が自分が何もしないで此処にお世話になっている事が落ち着かないので手伝わせて欲しいと言うので諦めたのか手伝うことを認めてくれた。

「それでは朝食を取った後に、私の薬草採集を手伝ってくださいませんか」

「僕は薬草の事については何も知らないけどそれでも良いかな？」

「大丈夫です私が採る薬草を持っていたければそれで、あと薬草についても教えて差し上げますよ」

「わかった、あと綾さんに薬草について教えてもらえるのも楽しみだよ」

その後他愛も無い話をしながら綾は朝食の準備をし、仁太はそんな綾を見つつ自分にお嫁さんがいればこんな感じかなと癒されていた。

そんなこんなで朝食が出来上がり、食べようということに。ちなみに勘三郎は、木こりの仕事があるとかで朝早くに出かけて行つたとの事で不在である。

そのため綾と仁太、そしてしずの三人での朝食だ。

朝食は蒸かした芋が一人当たり数個程と、綾が採ってきた薬草を煮ておひたしにしたものであった。

「こんな朝食しか用意できず、申し訳ありません」

「気にしないで、どちらかといえば僕が勝手に厄介になっているようなものだし、この朝食もおいしそうだよ」

「おいしそう」という言葉で嬉しそうに顔を紅くする綾、そんな綾を見てまたまた可愛いと思ってしまふ仁太はもう綾に骨抜きにされてしまっているとみて間違いないだろう。

そんな仁太の心境を知ってか知らずか、仁太の食事の準備をする綾はどこか嬉しそうな雰囲気のを漂わせている。

「綾様と服部様は夫婦めおとの様でございますね」

その様子を見ていたしずは悪戯でもするような顔で二人に言葉の爆弾を投下、それを聞いた綾はこれでもかと顔を紅くしてとても恥ずかしげに顔を伏せ小声で何事か呟く。

「わっ、私と服部さんが夫婦めおと……」

仁太もしずの言葉の爆弾により、綾が自分のお嫁さんだったらと思っていたことを思い出して顔を真っ赤にして黙り込む。

「あらあら、二人とも脈ありですか？ これはおめでたいですね。近いうちに綾様のお子様を見ることが出来そうです」

綾と仁太が顔を紅くして恥ずかしげにしているところに、さらなる爆弾を投下するしずは悪戯が成功した子供のような顔をして楽しそうにしていた。

ちなみにこの件を後から聞いた勘三郎は妻の不敬の態度に絶句し、また仁太に対してどうしてくれようかと暗い決心を固めたことは本人たちは知らないほうが良いだろう。

しずくに弄られながらも朝食を終えた三人は暫しの間話すことにした。

「昨晚主人と話したのですが、昨日綾様が捕まりそうになった事を考えてもこの場所が見つかるのも時間の問題だと思います。

そこで隠れ家を移そうという事になったのですが、服部様の戦い方を綾様から聞いた主人が是非とも一緒に移る場所を探して欲しいと言っております。

服部様、主人と一緒に良い場所を探していただけにしようか？」

「そんな、僕は戦ったというような立派な動きはしていませんよ。ただ綾さんを無事に助けるために動いただけですのでそこまで評価される理由はありません」

「主人は言っていましたよ、敵を殺さずして無力化し逃げおせるといふ事は技術がなければできない、それをやってのけた服部様は並みの少年では無いのであろう、と多分これは過大評価では無いと思います。

敵を殺さなかった事でこちらの消息が分かってしまうので、甘いとは言っておりますが事情も知らない服部様に罪がある訳でもございませぬ。

しかも綾様を憎からず思っているのが分かった、との言葉に、りましたし、綾様を護るためにお力をお貸しできないでしょうか」

最後の「綾様を憎からず思っているのが分かった」との言葉に、あの時の恥ずかしさを思い出した仁太は顔を紅くする、隣を見ると綾が同じように顔を紅くして座っているのが見える。

それを見て仁太は綾をとて愛おしいと感じ大事に思っている自分に気がついた、そして決意を持って告げるのであった。

「わかりました。服部仁太、綾さんを護るために頑張ります」

こうして服部仁太と綾姫の戦いは始まりに向け動き出す。

第五話 綾の事情（前書き）

投稿が大変遅くなりまりごめんなさい。。。

第五話 綾の事情

仁太が綾を守る為に綾の後見人である勘三郎と移住の地を探す旅に出たのは、決意を顕わした次の日であった。

綾が川津の国の家来に追いかけられてから二日が経っていたが、勘三郎は綾様が襲われたのは山小屋のある場所から数刻程離れておりすぐには見つからぬと言っており、あと5日は余裕があるとのことであった。

しかしゆつくりと探している暇もない。

ならば昨日にでも勘三郎が木こりの仕事に行かず探せばいいように思うが、もともと仕事をする事を仲間内で決めており、周りの噂になるような特別な事をして敵に見つかる可能性を上げたくなかった為である。

「服部殿、今回はいろいろと協力をしてくれているにもかかわらず御礼も出来ずにすまぬ」

仁太が隠れ家探しに旅立ってから半日歩き回った所で勘三郎がいきなり謝ってきた。

あまりにいきなりの謝罪であったためすぐには反応できない仁太であったが、勘三郎はそれを無視して続けた。

「本来であれば儂らが姫様を守ってやるのが筋なのじゃが、恥ずかしながら儂は実際の戦いを経験しておらぬ、そこで姫様から敵の追っ手に追われた時に服部殿が殺めることなく余裕で対応したと聞いて、服部様なら守る技術わざを持っていると思ってお願ひしたのじゃ」

「確かに綾さんが追われていた時に敵を殺めませんでした、しかし状況も掴めず僕も相手を殺す事について抵抗があったので殺さなかつただけです。」

余裕があると勘三郎さんは思ってたらしいんですがそんなことはありません、結構あの場では一杯おっぱいでしたよ」

勘三郎の評価に苦笑の表情を浮かべつつ否定する仁太、実際の場では余裕なんてあったものでは無かった。

技術的には幼い頃から行っていた忍術の修行の成果もあり大丈夫ではあるが、平和な現代の高校生であった仁太には実践の経験は無く、精神的な余裕なんて無かった用に思う。しかし勘三郎は仁太の発言に別の感想を抱いたようであった。

「そうかのう、儂には服部殿の発言を聞いて余裕があるように受け止めましたぞ、自らの心情に抵抗があり敵を殺めなかったと言っておられましたか、それは裏を返せば殺さないという選択ができる程の腕前と心理的にも余裕があったという事じゃ」

思うところはあったが反論の言葉が見つからないため、これ以上の返答を控えた仁太に、勘三郎は暖かい眼差しを向けた、それはあたかも息子や孫の成長を見守る親や祖父のような眼差しであった。その視線をから逃れるため唐突に話題の転換にかかった。

「それはともかくとし、聞いてみたいことがあるんだけど」

「なにを聞きたいのじゃ」

明らかに注意を逸らせるために振った質問であったが、昨日綾姫が川津の国から追われているという話を聞いた時からとても気になっていた事を聞いてみる。

勘三郎も話題を逸らせていることを察していたが、仁太が質問をしたいと切り出してそれを受ける返答をすると真面目な顔をして向き合ってきた。

「綾さんが佐津の国の姫様であることは判ったし、そのために敵対国から追われているという事だけれども腑に落ちないことがあるんです」

「どういうことじゃ」

聞き返す時に勘三郎は、何か試すかのような雰囲気変わったのを仁太は感じ取る。

「いくら敵国の子息とはいえ女の子を一人放っておいたところで、川津の国にとっては自国を脅かすほどの脅威にはならないと思うんです。」

しかし僕が綾さんに会った時の追っ手は明らかに綾さんを探していた様子でしたし、昨日の話を聞くと綾さん一人を探す為此の戦乱の時に兵を動かすというのはまず考えられません、ということは綾さんは何か特別な理由があって追われているのではないですか？」

仁太の質問を聞き一時感心したような顔をした後、勘三郎は苦々しげに話し出した。

「服部殿はなかなか鋭いの、確かに一人のために兵を動かす事は普通はしないの。」

これは今回の戦の原因にもなったのじゃが、実はの川津の国の荒幡はたせいのう濟重の息子である竹丸が綾様の容姿が端麗であると何処かで聞いてきたらしくて、戦の前に綾様を妻として差し出せと行ってきたのじゃ。

それを主殿が断つたのを口実に戦を仕掛けて来て佐津の国を滅ぼした拳句、綾様を息子の妻に迎えるというのは本気だったらしくてのそれから兵を使い搜索をしているらしい……」

勘三郎の話を聞き終えた仁太は、湧き上がる怒りをこらえながら

言葉を吐き出した。

「なんだよその理由はっ、綾さんを馬鹿息子の妻にしようとしてそれを断られたからって国を滅ぼし、尚且つ家族を失った綾さんを追いかけて回すとはどれだけ我儘なんだ」

「川津の国はもともと好戦的で野心の強い国でな、気に入らないことがあると武力を使い思い通りに物事を進めようとするのじゃ、これまでにどれだけの国が滅ぼされた事が……」。

しかし今は戦乱の世の中じゃ強い国が弱い国を滅ぼし併合していくのは仕方ないこと、佐津の国が川津の国に滅ぼされ無くとも戦う事が不得手であったから、他の国に攻め込まれて滅ぼされるのも時間の問題だったしの」

勘三郎は理解はしているが納得はしていないのか複雑な心境を隠すそうとはしていなかった。

勘三郎さんも心境的には複雑なんだな、でもこのままじゃあ綾さんはずっと川津の国の追ってから逃げ続けなければならぬ。

なんとかして綾さんが逃げ回らないで済む方法を見つけないと……。

……。

綾姫の現在の状況を知るに従い守ることの難しさを改めて思い知る仁太であった。

第五話 綾の事情（後書き）

あゝ、話がまとまってない……………。

こんな中途半端な感じで投稿するのも心苦しいですが、次話はなるべく早く投稿しますのでご容赦くださいm（- -）m

サブタイトルに違和感があったので変更してしまいました……………。

第六話 山賊だった男

綾の事を勘三郎から聞き終えた頃、空が夕焼けで赤くなり始めた。そのため仁太達はこれ以上動くことをやめ、森の中で野宿をする事になった。

勘三郎は付近に薪と食材を探しに行き、仁他は食事をする為の竈かまどづくりを始めた頃それを離れた木の陰で観察している男がいた。

その男は所々が解れている着物を身につけており、その上には獣の毛で作った上着、腰には斧が下がっている。

格好だけを見れば百人中百人が山賊だと言うであろう、しかし彼の顔は山賊のイメージとはかけ離れたものであった。

顔立ちはほっそりとしており優しく垂れた目は子犬を連想させ、また小さな鼻と口が男の年齢以上に幼さを感じさせるのである。

「その木の陰に隠れている者よ、姿を現したらどうだい？」

竈を作りながら、仁太は男が隠れている木の方角へ穏やかだが有無を言わせない口調で呼びかける。

しかし、声をかけられ暫くしても姿を現さないのもう一度呼びかけた。

「居るのは判っているんだ、今更隠れ続けた所でどうなるわけでもないだろう？」

いったいいつまで隠れてるつもりだろうか、見つかったと判った段階で取る行動は襲う、出てきて交渉、逃げるなどがあるが出てくる様子が無いな。仕方が無いからこちらから挨拶にでも行つてやる

か。

仁太は忍者としての修行で自身の気配を消すことはもちろんの事、他人の気配を察知する術も取得している。これは敵方に侵入する時には必須の技術であり、特に意識することも無く他人の存在を感じることが出来る。

「さて出てこないのなら仕方ないな、こちらから出向くとしようか」

肩を竦めながらそんなことを言った仁太は作りかけの竈の前から姿を消し、そして隠れている男の前に現れた。

「初めまして、今日はどのようなご用件でしょうか？」

木の陰に隠れて居た男は、一瞬の出来事に驚いている様子であった。

先ほどまで竈を作って居た仁太が、いきなり目の前に現れたのだからそれも仕方ない事ではある。

戸惑いと驚きに反応を返せない所にまた言葉がかけられる。

「流石に黙ったままで居られるとこっちも困るんだよね。」

このまま黙りを続けるのであれば実力行使も辞さないよ!？」

「まっ、待ってくれ、あんたがいきなり目の前に現れたからビツクリしてよ。」

別にあんたに危害を加えようとしていた訳じゃねえんだ」

仁太の実力行使という言葉が聞こえたのか、男は慌てた様子で返事を返してきた。

そこへ勘三郎が薪と食料を持って現れた。

「服部殿その男はどなたかな？」

自分と仁太しか居なかったはず所に、見た目は明らかに山賊と思われる男が居るのが見えたために警戒を持って訪ねてくる勘三郎。

「先ほど竈を作っている最中に、木の陰からこちらの様子を見張っていた山賊？」

「ほう、山賊ですか。」

確かにここ一体は山賊が棲み着いていて、佐津国から水泊国に商人が品物を運んでいるとよく襲われました。

そのために国の商人が大打撃を受け、一度討伐の兵を向けたことがありました。

その仲間では無いでしょうか？」

「なにっ、おまえは佐津国の者か！！」

……俺の親父はその時の兵に殺されたんだ、まあそれで山賊稼業に嫌気が差したんだけどよ」

沈痛な面差しで話す男に、仁太は男が嘘をついていない事を察する。

「そうか、あの時に兵達が首領をの首を取ったと言っていたが、あれはおまえの父親であつたか…」

さぞかし佐津国を恨んで居るであろう。

儂は討伐の兵を送ることを決めた、おまえの父親の敵と言っても過言は無いだろうな」

「別に恨んじやぁいないよ、俺たちは散々人から恨まれる事をしてきたんだ。」

なら、誰かからそのお返しが来てもおかしくなかった。

俺も親父を無くしてみてもいいそれを悟ったんだ……」

その言葉を聞いて仁太は疑問に思った事を質問する。

「さつき山賊稼業に嫌気が差したと言っていたけど、あなたは山賊を辞めたと言うことなのかい？」

「ああそうさ、もう人から盗みを働いて恨みを買う事が嫌になつてな、一応親父が死んでから山賊の親玉みたいな事をやっていたのだが農業で細々と生活しようとみんなに提案したところで、おまえみたいな首領はいらないと追い出されて今に至るわけさ」

すでに諦めた様な表情になり、静かに話す男に仁太は男の哀しみをみた。

この男にすれば山賊達は家族みたいなものであつたのであろう、しかし家族で協力して足を洗おうと思つていたら追い出されてしまい、家族を失つたのと同じくらい辛いのでは無いだろうか。

「なるほどな、それは大変だつたな。」

ところでおまえ以外の山賊達はこれからどうするつもりなのじゃ、佐津国が川津国に併合されたことでこの地方を通る商人はあまりいないであろう、ここで山賊をしていても生きてはいけんと思つのじやが？」

「それはここから商人のいる町に出向き、盗みを働くと言つていました。」

全員が賛成というわけでも無く、何人かは山賊組織を私と一緒に抜けて逃げてきましたが、途中で捕まってしまうして今は私人なのです」

「その中におまえの家族が居るのでは無いか？」

男は途中で捕まつたと言うところでさらに口惜しそうな顔をしたため、勘三郎はそんな事を聞いてしまう。

すると男は顔を下に向け、流れ出る涙を賢明に堪える様にしながらも、我慢が出来ずに嗚咽を漏らし泣き出した。

「やはりそうであつたか……」

勘三郎は苦虫をかみ殺した様な、苦々しい顔をし黙り込んでしまつた。

仁太は嗚咽を漏らしながら泣く男と、苦々しい顔をしている勘三郎を眺めていた。

それは現代の平和な日本で生きてきた仁太にとっては実感が沸かなかつたからである。

しかし、元山賊の男が自分の父親を殺されたにも関わらず、佐津国を恨むどころか山賊稼業を廃業しまともな生活をしようとする事、事の凄さに圧倒されていた。

仁太は、家族の事を心配するこの男を助けたくなっていた。

「生きていればあなたの家族を助けられるかもしれませんが、私の仲間になりませんか？」

仁太の言葉に男は泣いていた顔を上げ、返答を告げるのであつた。

第六話 山賊だった男（後書き）

思い描く風景や、登場人物達のやり取りを文章化する事の難しさを日々感じています。

書く内に自らの技術を高めていければ理想だな…。

次回は仁太が活躍する予定？

今月中の更新を目指します。

第七話 飯井山地方

「仲間になります。是非、助けてください」

男の返答は先の行動から予想された事であつた。

「なつ、なんじゃと！ この男を助けること、本気ですか？」

「はい、私は本気ですよ。」

この方の家族を助けようと考えています」

勘三郎は仁太の考えが分からず、困惑を隠せない様子である。それを見た仁太は勘三郎を元山賊の男から離れた場所まで連れて行き、勘三郎にのみ聞こえるように話す。

「この男を助ける目的が分から無いんですね？」

「ああ、その通りだ。」

ここで元山賊の男を助ける理由はあるのかね、綾様を護るのには必要が無いように思うのじゃが？」

「ここに来る前にしずさんからこの世界の状況を教えて貰いました。それによると此処は元佐津国の領土であつたにも関わらず、実質は山賊達が治めていたような地域で在つたと聞きました。」

うまくいけば此処の山賊を一掃出来ます。そして新しい国の拠点を作ることが出来ると思います」

仁太の発言を聞いた勘三郎は心底驚いた風であつた。

それも無理は無いだろう、山賊一掃という目的だけであれば仁太は正義感に駆られて助けようと言つたのだらうと思えるが、仁太は”新しい国の拠点”と言つてのけたのだ。

これは隠れ家を作るのではなく、綾の為に護る器を一から作り直

そうと云うとんでもない発言であった。

「なっ、とんでもない事を言い出すな！」

綾様を護る為に国を作ると言い出すとは……。

しかしワシら三人だけで何とか出来るのであるうな、ワシには考えがあつても不可能な様に感じるのじゃが」

「このまま綾さんを逃がし続けるのは難しいと思います。しかし国が出来て協力者が増えれば私の知識を使えば護ることが可能になるでしょう。」

あと山賊達をどうするかですが、計略で何とかなると思います」

「うゝむ、ワシにはその方法が分からんが仁太殿の言葉を信じるぞ、確かに綾様がこのまま逃げるのは難しいのは事実じゃからな」

勘三郎は一応の納得を見せ、仁太に協力すると申し出てきた。

仁太は一つ頷くと山賊の元頭へ近づき、家族を助けることに協力することに決まった事を伝えた。

それを聞いた山賊の元頭は「お願いします」と深々と頭を下げる。

「ところでこの男が仲間になったのは良いが、名前を教えて貰えんかのう。」

さすがに名前も知らないままでは、共同で事を成すのは難しいと思うのでな」

「それは失礼しました、私は茂吉と申します。

この飯井山地方で山賊の頭領をやっております」

自己紹介をしながらこちらを見上げてくる茂吉の顔には安堵の表情が見える。

勘三郎から名前を聞かれ、仲間として一応は認められた事に対する安堵なのであろう。

ここで飯井山地方について説明をしよう。

飯井山地方は南にあった佐津国の領土ではあったが、佐津国が川津国に侵略された事により治める者の居ない浮いた地である。

これといった資源もない山の中の辺境のため川津国は今のところ特に関心を持っておらず、実際には山賊がこの地方を治めていると言っても良い。

周囲を高い山々に囲まれ、中央には霧川という結構大きな川が流れており南には旧佐津国があり、北には水泊みずどまりという医学先進国がある。

南と北の狭い場所意外からの進入は難しく、陸の孤島と云うのが相応しいような場所である。

「よろしく茂吉さん。」

それでは作戦を考えなければなりませんので、この飯井山地方について詳細を教えてくださいませんか」

「分かりました、私に何をお尋ねになりたいのでしょうか？」

「確かこの飯井山地方は治める領主が居無いんですよね？」

「はい、その通りです。」

そのかわり私の父や私が頭領の時には、仲間達が食べていけるだけの作物を納めて貰っていました」

「現在はどのようなのですか？」

仁太の質問に茂吉は苦虫を嚙んでいる時のような渋面を作りながら話し出した。

「今は盗賊になった者達が村々を周り、年貢と称して有る物を根こそぎに奪っていつているようです。」

さすがに始まってからそんなに日が経っていない為に餓死者は出ていないようですが、このままの状況が続けば確実に村人の中に餓死者が出てくるでしょう……」

「やっぱりそうですか……、ところで飯井山地方に在る村の人口は何人ぐらいですか？」

「この地方の村の人口か？ そうだな、大体で五百人程だな」

「では今現在、盗賊として動いているものの人数は？」

「三十人程だが」

茂吉の言葉を聞き仁太は少し考え込む、そして顔を上げると不敵な笑みを浮かべて呟いた。

「では、ねずみ退治と参りましょうかね」

この時仁太の顔を見た勘三郎と茂吉は後に「あの時の仁太（さん）の顔を見たときは背筋が寒くなった」と話していた。

第七話 飯井山地方（後書き）

更新が大変遅くなりました。

なかなか文書がスムーズに書けず、こんなに間隔があいてしまいました。

これも私の腕が未熟な証拠ですね……— — —

次は仁太がねずみ退治を行います。

これからも駄文ですが宜しく願います。

厚かましいお願いではございますが、評価等を戴ければ幸いです。

第八話 盗賊の里（前書き）

風邪をひいて家から一步も出なかったので思いのほか早く八話が書
けました。

本当はこれぐらいの頻度でUP出来ればいいのですが・・・。

第八話 盜賊の里

ねずみ退治宣言をした仁太は、元山賊であつた盜賊達の情報を集めるために行動を開始する。

茂吉から盜賊達の隠れ里の場所を聞いた仁太は一人でその場所へと向かった、茂吉と勘三郎は着いて行くといったのだが忍者である自分の隱密性が失われるので丁重に断つたのである。

隠れ里傍の木の上に陣取つた仁太は、氣配を殺しながら里の中を觀察し始めた。

仁太の現在の服装はこの世界に迷い込んだ時の忍び装束を裏返して着ている、裏側は迷彩柄になっており明るいうちはこの格好の方が目立たずに行動できるからである。

盜賊達の隠れ里は切り開かれた林の中にあり、粗末な小屋が15軒程建っているだけの小さな集落であつた。

人口も30人弱程しか居らず女性と子供は居ない様に見受けられた。

そつといえば「山賊をやつていたから嫁が来なかつた」って茂吉が言つてたつけ、でも頭である自分には近くの村に嫁に来たいという娘が居たため山賊の中では珍しい夫婦であつたとか。

でもその娘を護るはずの茂吉が居なくなつた現在、その娘がどんな扱いを受けているかを考えると背中に冷たいものが流れる。

「明るい内はこの里の盜賊の動きを觀察して、夜になったら人質達の捕まっている場所を探すかな…」

聞くものは居ないが自分の行動の確認を取る意味で小さく声に出

す仁太。

その行為は元の世界で修行中にお頭父親から「隠密性を損なうから止めるように」ときつく言われていたが、癖になっているらしくなかなか直らないのである。

木の上で里を観察していた仁太の耳に盗賊達の会話が聞こえてきた。

「前の頭の女だけだよ、一緒に放り込んである前の頭の側近達に護られていて、まったく手出しできないらしいぜ」

「奴等も頑張るな、食事を与えてないって話だったからもう観念したと思っただけだよ。俺はここは女がいねえから結構楽しみにしてたんだ、今度盗みに入った所で若い娘でも手籠めにするか」
「そうだな」

盗賊達は気持ち悪い笑いを出しつつ、仁太が隠れて居る木から離れていく。

茂吉さんの奥さんはまだ無事みたいで良かった、でも次は盗みに入った先の娘を襲うと言ってるし害獣と変わんない連中だな。

まあ、これぐらい分かり易いぐらいに悪人であるならば、退治をしても罪悪感に悩まされる事も少ないだろう。

しばらく木の上での観察を続けていた仁太であったが、辺りが夕闇に包まれて来たために忍者服を表（赤黒い色）に着替えた。

これで暗闇の中を動き回っても目立たないはずだ。

夜は忍者のゴールデンタイムだと云われるが、仁太が元居た世界

では夜になっても人工の光が普及しているために完全な闇になる事は無く、この赤黒い布で作った忍者服の効果は期待出来なかった。しかし、この世界には明かりといえは松明や灯明、良くて蠟燭ロウソクの明かりだけであり、この忍者服も最大限に効果を期待できるだろう。

「さてと、周りも暗くなってきたし行動を開始しましょうかね」

やはり聞くものが居ないなか小さく独り言を呟いた仁太は、夕刻より潜伏していた木から地面に降り立ち漆黒の中へと自らを同化させた。

闇夜に同化しながら盗賊の里を移動していた仁太は、里の中心に在る小屋の近くの物陰に隠れている。

その小屋には盗賊と思われる人相の悪い男達が二人、欠伸あくびをしながら見張りのような事をしていた。

しかし奴等やる気が無いね、まあ盗賊にやる気や統率などを期待するのが馬鹿らしいんだけど……。

さて、木の上で得た情報だとあの中に茂吉さんの家族と茂吉さん同調派が居るわけだな。

今日のところは様子見だけにしようと思っていたけど、昼間の盗賊達の会話から判断すると時間も無いみたいだしついでに助け出して置くのが得策かな。

うまくいけば自分達が何者かに狙われていると感じて下手な行動を取れなくなるだろうし、一丁派手にやろうかな……。

そう考えると懷から細長い棒を取り出した。

それは棒手裏剣に見えるが素材は竹で出来ており、現代人が見れば百人中百人が見れば”お箸”と答えることであろう。これは鉄製

の手裏剣が当分手に入らなさそうだと感じた仁太が、代用できるように近くの竹から作り出したものである。

鉄の様に骨を貫通するとまでは行かないが、皮膚を破るくらいは仁太の腕を持つてしてみれば造作も無い事なので問題ない。

仁太は見張りの一人に狙いを定め、軽く竹製の棒手裏剣を投げた。それは傍から見れば本当に軽く放ったように見えるであろうが、幼少から厳しい修行を耐え抜いた仁太が投げると途轍もない威力がある。

その手裏剣は見張りの男の首に刺さり違和感を感じて手を首筋に持っていたが、男が自分の現状を理解する間も無く前のめりに倒れこんだ。

仁太はそれを確認することも無く二本目の手裏剣を投げる。

二本目の手裏剣ももう一人の見張りに見事命中し、男が自分の状態を理解する事も無く倒れこんだ。

普通に手裏剣が当たっただけでは大人の男が倒れるなんて事はないが、先ほどの竹製の手裏剣には致死性の毒が塗っており、皮膚の中に入っただけで効果がある。

二人の男が地面に倒れ伏したのを確認した仁太は、周囲に人が居ないことを確認し小屋へと近づいていくのであった。

第八話 盗賊の里（後書き）

やっと仁太が忍者らしい動きを見せられました。

戦闘を期待されていた方々には申し訳ありません。

忍者は影に生きる者だと思っており、仁太が直接戦うことはこれからあまり多くなさそうです。

まあ、このお話は作者の妄想が主成分の為にこれからどうなっていくかわかりませんがw

厚かましいお願いだとは思いますが、評価を戴ければ嬉しいです。

2011/2/5 女性と子供はほとんど居ない↓女性と子供は居ない と訂正

第九話 盜賊壊滅

仁太は周囲に敵が居ないことを確認した後、慎重に小屋へと近づいた。

先ほど安全を確認したが、念のために鉄製のクナイを手にとっておく事も忘れない。

忍者というものはどんな時でも最悪を考えて行動することが求められる、仁太は小さな時から修行で刷り込みを受けたので石橋は叩いて安全を確認しさらに安全策を採る程の慎重さを身に着けた。

しかし慎重なだけでは忍者はやっていけないので程好い位には大胆さもある。

小屋の影に隠れて周りの気配を探るがこちらの变化を悟られては居ないようで、辺りは暗闇と虫の声がする他は静かなものだ。

些か拍子抜けをした感が否めないが、盜賊相手に嚴重な警備を求めるのも酷な事だろう。それどころか大した抵抗もなく人質を救出する事が出来るのであれば文句も出ようはずが無い。

小屋の木戸の外側にあるつつかえ棒を外し小屋の中の様子を伺うが、外に居た男達以外の見張りには居ないようだ。

小屋の中を見渡すと中には、若い女性一人とそれを護るようにして男が五人座っていた。

「こんばんわ、皆さんを助けに来ました」

緊張感のない仁太の声が小屋の中に響き渡る。その声に驚き、男達はこちらを向き身構えるがその構えは衰弱している為に弱いものだ。

「そんなに構えなくても大丈夫ですよ、私はあなた方を助けに来たのですから」

「そんな言葉を信じられるか」

「昔の仲間に私は居なかったと思いますが？」

「前は居なかったかも知れないが、新しく入ったやつが居てもおかしくない。それにお前がここに入って来る時に戦っている気配が無かった、それはお前が奴等の仲間だという証拠だろ」

あちゃー、敵側に無用な警戒を与えないように入り口の男達を倒したのは失敗だったかな。でも助けた後の事も考えると警戒を煽る訳にも行かなかったし、どうやって理解をしてもらおうか……。

しかし、茂吉の元に早く奥さんを戻してやりたいし仕方ないな。

「今は話している時間が惜しい、出来ればこんな事はしたくないんだけど……」

「俺達と戦うと言うのか、やはり助けに来たというのは嘘だったという事だな」

男達は戦う構えを見せ仁太に向き直って来る。それを見た仁太は肩を竦めると、気乗りしないながらも懷から火縄の付いた丸い物体を取り出して縄に火を付けて床に転がすと小屋の外へ出て行った。

男達は何かわからず、その場で丸い物体を床に置き仁太が小屋の外へ出て行くのを怪訝そうに見ているだけで動かない。

仁太が小屋の外へ出て、戸につつかえ棒をして開かないようにした。暫くすると小屋の隙間から煙が漏れ出し小屋の中から戸を叩き何かを叫んでいるのが聞こえたが、煙が出てこなくなる頃には静かになった。

さて、眠り玉が効いて中の方々はぐっすりと眠ってくれたかな。

はあ、眠っている人を連れて行くのは手が大変なんだけど…。

そう心の中で呟きながらつつかえ棒を取り小屋の中へと足を踏み入れる。入って直ぐの所で男が一人眠り込んでいたため、それを跨ぎ中を見回すと崩れ落ちるように残りの男女が眠り込んでいた。

ようし、この人達を外に出すために勘三郎さんと茂吉さんをお願いしますか。でもさっきの叫び声を聞いて盗賊たちに気が付かれた可能性もあるしちょっと周りを警戒してから行きますかね。

小屋の屋根に登ると周囲の気配を探ってみたが、微かに盗賊達の騒ぎ声が聞こえるだけで誰も近寄ってくる気配が無い。

本当にここ盗賊達はバカだよ、こんなに騒いでるのに異変に気が付いてないんだからな。

このまま騒いでいるところに出向いて行って壊滅させてしまおうか…。本当は強い相手が居る事を前提にいろんな策を考えていたけど、これだけバカなら策を弄するだけ無駄だしやっつけてしまおう。

そう考えると屋根から下り宴会の声が聞こえる場所まで音も無く近づいていった。

宴会場が見渡せる木の上に登り様子を見ると、盗賊達はお酒も入り気分良さそうに騒いだり中には屋外であるにも関わらず地べたに横になり眠っているものさえ居る。

流石にここまで来ると本当にこいつらは盗賊なのか疑わしいところだ。

仁太は忍者刀を抜くと自分の近くに居る盗賊に近づき背後から男の首を刎ねる、すると首から夥しいまでの血が噴出する。

騒いでいた盗賊たちも流石に異変に気が付いたようで、武器を持

ち首から上が無くなった仲間の周囲を警戒し始めた。しかし仁太は首を刎ねると同時に闇に紛れ宴会の逆側に移動していたので、まったく見当はずれな場所を警戒している状態だ。

ざわざわとした中、盗賊の頭と思われる男が怒りを露わにし叫んだ。

「おい、誰がやりやがった。出てきやがれ!!」

ふむ、出て来いと言われて出てくると思っているのかね。もし思っているとしたら、こいつら救い様も無いバカだよ…。

あくまで俺は忍者だからね、姿を顕さずに頭だけ残して屠ってやるとうまいか。

そう決めると仁太は毒を塗った棒手裏剣を四本取り出し、盗賊四人に狙いを定めて投げる。

盗賊達は警戒して一塊になっているので、いとも簡単に的となり倒れていく。その動作を繰り返し頭を残しあつという間に盗賊を倒した仁太はやつと木から下りる。

盗賊の頭は自分の周囲でもの言わぬ骸となっている仲間を見て戦意を喪失した様で、その場に立ち酷く怯えた様子で仁太を見て言った。

「おつ、お前がやったのか…」

「ああ、そうだ。おれがお前の仲間を一人で屠ってやったのさ、お前だって盗みに入った場所でやっただろう、自分がやられる覚悟はもうとつくに出来てたんじゃないのか？」

「やつ、やめてくれ。殺さないでくれ、なんでもやる」

「お前だけはすぐには殺さないさ、役に立ってもらわないといけないからな。」

さて、静かに眠っていて貰おうか」

そう言うと、仁太は盗賊の頭の鳩尾に刀の柄を叩き込む。

頭はいとも簡単に意識を失い、その場で糸の切れたマリオネットの様に崩れ落ちるのであった。

第十話 疑心暗鬼

気絶した盗賊の頭を持っていた縄で縛り上げ、仁太は茂吉の妻達が眠る小屋へと戻りながら考えていた。

ああ、あまりに盗賊たちがバカだから頭以外の奴等を殺ってしまったよ。本当は救出したうえで周辺の村から人を募り叩こうと思ってたんだけどなあ…、これで計画はパアだわ。

前から親父に言われてた事だけど、面倒臭くなって後先考えなくなるこの性格嫌になるなよ…。

今度は自分自身のバカさ加減に嫌悪し軽く凹む。しかしこのまま凹んでいても自分がやってしまった事が変わる事も無く、後ろ向きになってしまった考えを払うために頭を振る。

小屋の前に着き中から人が動く気配が伝わってきた。

先ほど使った眠り玉は一時的に相手を無力化するための物なので効果は三十分程度で切れてしまう。この気配は茂吉さんの奥さんや護衛の男達の気配でほぼ間違い無いであろう。

仁太は直ぐに小屋に入ることはせず、壁に取り付き隙間から中の様子を覗き込む。もしかすると、盗賊が生き残っており中に居る可能性もあるからだ。

仁太は自らに危害が無く面倒臭いと思った事は短絡的な思考に行くことが多いが、危害が及ぶ可能性が高い時にはどれだけ回りくどいと感じたとしても、しっかりと確認する用心深さも持っている。

これは長い忍術の修行の最中に師匠である父親から嫌というほど体に覚えこまされた結果であり、実際の性格は面倒臭がりであることは間違いないだろう。

まあ、確認して入った方が面倒なことにあたらないので、実際の正確に合致しているとも言えるのだが…。

周りを見回すと先程眠り薬で眠らされた男達が、意識のはっきりしない頭を抱えながら身を起しており。どうやら盗賊達の生き残りはこの屋敷には居ないものと見て良さそうだ。

取り敢えずの安全を確認したので小屋の中へ入ることにする。警戒は解かず、右手には荒事にすぐ対応できるように暗器を隠して持っておくことは忘れない。

小屋の戸を開いたところで、中の男達がこちらに気が付き得物を持ち上げ威嚇しようとするが、足元がおぼつかない為にまったく構えになっっていなかった。

「貴様、さっきはなにをしゃがった」

一人が睨みつけながら強がっているが、仁太からして見れば負け犬の遠吠えぐらいにしか感じない。

「再度言いますが、私はあなた方の敵ではありませんよ。茂吉さんから頼まれて助けに来たのですが、騒がれて外の奴らに気が付かれそうだったので眠り薬で眠ってもらっただけです。あなた方が眠っている間に盗賊達を潰して来たんですよ」

「それが信じられるか。お前が奴らの仲間という可能性もあるしな」
うーん、参ったな。この状況だと倒した敵を連れて来ても信じて貰えそうにないや。茂吉さんを読んだ方が話が早く終わさりそうだし、呼びに行こうかね…。

「なら、ここに茂吉さんが来て証明して貰いますね。この小屋の中でしばらく待っていてください」

そう言い残すと、仁太は小屋の戸をつつかえ棒で開かない様にして茂吉を呼びに出掛けていった。

あらかじめ決めてあった合流場所で、茂吉達と出会った仁太は顔を俯かせ沈んだ声で話始めた。

「茂吉さんすみません、失敗しました。」

「まさか私の妻はもう…」

「服部殿、それはどういう事ですか？」

沈んだ声で勘違いをした茂吉は地面に倒れこみ悲嘆に暮れる、勘三郎は、冷静に仁太の発言の意味を読み取ろうとしている。

茂吉の様子を見た仁他は、自分の言葉の使い方が間違っていた事

に気が付き慌てた。

「へっ、茂吉さん違いますよ。

失敗したと言うのは作戦通りに出来なかったという意味であって、あなたの奥さんは無事です」

茂吉は地面に崩れ落ち悲嘆に暮れていたが、仁太の言葉を聞くと詰め寄ってきた。

「それは本当ですか？

私を慰めようとして嘘を付いているのではないですか、本当の事を教えてください」

「本当ですよ、私が嘘を付いてどうするのですか。

それで、あなたの奥さんを守っている忠実な部下達が私のことを信じてくれないので、茂吉さん呼びに来たのですよ」

仁太が再度落ち着いた調子で、嘘では無い、と言ったのを聞いた茂吉はやっと落ち着きを取り戻した。

しかし、あんな調子でよく山賊の頭をやっていたなあ。それとも奥さんの事をそれだけ愛しているから、あれだけ取り乱したのだろうか…。

まあ、取り敢えず百聞は一見に如かずと言うし小屋に連れて行きますか。

「では奥さんの元へ行きましょうか、そこで早く私が仲間であることを説明して貰わないと先の方針も話し合えないので」

すっかり元気になった茂吉は、嬉々とした表情で仁太の腕を引っ張る。

「わかりました。では早く行きましょう。
今すぐ行きましょう！」

凄い勢い引っ張ってくる茂吉にタジタジになるが、勘三郎は微笑みながら見るだけでまったく助けってくれそうにない。

諦めてされるがまま引かれていく仁太は、ある歌の歌詞にある子牛の心境だった。

第十一話 礎

茂吉に牽きづられながら仁太は小屋の前にたどり着く。

連れられて来る途中に恋は盲目という言葉を思い出し、次に同じ事があつた時には氣を付けようと固く心に誓つたのは仕方ないことであらう。

「茂吉さん」

小屋の前に着いた時、仁太が今までに無い固い声音で茂吉に声を掛ける。

茂吉も仁太の放つ雰囲気が今まで以上に真剣なのに気付き、やや緊張した面持ちで顔を向ける。

「森の中であなたにあつた時、私は仲間になりませんかとあなたに聞きましたが、実際仲間にならないと言われても助けるつもりで居ました。しかし状況的に茂吉さんの家族を盾に仲間になれと言っているのと同じですし、ここで仲間にはなれないと言われても私は構わないと思っています。むしろ脅しているのと変わらない今の状況はこれからの為にならないと思うのです。」

私はこれからこの地方に国を作り、周辺の国と渡り合つて行かなくてはなりません。そうなつてくると命の危険に晒される事も多くなります。それでも私を助けてくれますか？」

そう言つと仁太は茂吉の目を力強く見据え。

「ですが国を作るのに盗賊の頭領をやっていた茂吉さんや仲間の方の力が必要なのです。危険を承知で私の仲間になつてくれますか？」

話が終わるのをじっと聞いていた茂吉は、静かに目を閉じて僅かに考えてから話はじめた。

「仁太さん、確かに私の家族を盾に取り脅している様に思うかも知れませんが、私は切羽詰まっていた状況で助けられないことも覚悟をしていました。」

私の妻は貴方が居なければ助けられなかったでしょう、助けてくれたご恩を返さなければなりません。今さら仲間にならなくてもいいと言われたって付いていきますよ」

仁太の目を見て固い意思を示す茂吉は、何があっても付いていくとの気迫が伝わってきた。その強い意思が伝わってきた仁太は嬉しくなり、茂吉の手を取ると頭を下げる。

「茂吉さんありがとう」

茂吉はそれに笑顔で返した。

「お礼を言わなければならないのは此方ですよ、取り敢えず私の妻を助けましょう。そのあとはみんなで話し合って決めれば良いではありませんか」

それを聞いた仁太は、ようやく普段の雰囲気を取り戻し少し照れて頭を掻いた。

外での話し合いの後、茂吉を伴い小屋に入った仁太は、落ち着いた様子で話始めた。

「私はここに居る茂吉さんに話を聞いて助けに来ました。私はこれからあることをしようとしています。それを皆さん手伝って貰えないでしょうか？」

すると中でも一番屈強そうな男が聞いてきた。

「あんたが俺たちを助けに来てくれたことは分かった、疑ってすまなかった。誰が味方が分からないあの状況で言葉だけで信じると言うのが難しい。俺は頭の奥方を守らなければならなかったからな……」

「いえ、気にしていませんよ。あの場面では仕方の無いことだと思います。あなたはやるべきことをやっただけです」

「そう言っで貰えると気が楽になるな。ところで俺達に何かやってほしいことがあると言っていたが、お頭はその事に同意しているのか？」

「はい。茂吉さんにお話ししたところ手伝ってくれと言っていました。人数が欲しいのであなた方も協力してくれば助かるのですが」

「お頭が同意しているなら俺には異存はねえ。俺達は山賊をやめると決めた時に頭に付いていくことを決意をしているんだ、他の奴等はどう思っているかは知らないが俺は手伝うぜ」

男が仁太の手伝いを公言したのに続き、周囲の男たちも同意するようにな真剣な表情で縦に首を振る。それを見た仁太は静かに目を閉じ、男の言葉を心に刻むと決意に満ちた目を開いた。

ここに戦乱の世に新たな風を吹かせる国の礎となる人物が集まった。

第十一話 礎（後書き）

今回はちょっと短めです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127m/>

戦国と綾ものかたり

2011年10月7日12時13分発行